走る!!実行委員長
小川先生を追跡

二十二日、ＯＲＦ前日準備が行われている会場を走り回っている実行委員長の小川先生を追跡取材した。ＯＲＦに関するインタビュー記事や、パンフレットなどに実行委員長として登場する小川先生の前日準備の様子をリポートする。

首からiPod shuffle、肩にNikonのカメラをぶら下げている小川先生は、何やら打ち合わせをしていた。私たちが取材を申し込むと、小川先生自ら、打ち合わせ中だった自動運転自動車の展示場所に案内をしてくれた。今回、自動運転自動車は会場に三台展示されている。小川先生は三台それぞれの展示場所に足を運び、担当の人たちと何度も検討しながら、自動運転自動車が見やすく映えるように角度や、パネルの位置などに細かく指示を出していた。打ち合わせをしている最中にも様々な人から声がかかり、また新たな話し合いをするという場面が何度も見

小川先生は会場内を移動しながら、多くの教授や学生が準備に力を注いでいる様々な展示に足を止め、何度もお気に入りのカメラのシャッターを押していた。会場を歩き回る小川先生は、実行委員長の仕事が忙しそうながらも、誰よりもＯＲＦを楽しんでいるように見えた。私たちが追跡取材を申し込んだときには、小川先生の写真を撮っていると「じゃあ、僕も撮っちゃお!」と記者の私たちが逆取材をされるようなこともあった。実際、この記事を書いている最中にも、「あれ、取材しなくていいの!?出来上がっちゃうよー」と、ガーデンで組み立て中の模型の様子を、編集部まで伝えにきてくれることもあった。その組み立てられた模型はミニチュアの街で、電車の中に混じって自動運転自動車が走っている。1人乗り用の小さい自動運転自動車が、街の中をかけている様子を見ると誰もがワクワクするだろう。「鉄ちゃん」の小川先生は少年の様に目を輝かせながら、何枚も何枚も写真を撮っていた。

この日一番ＯＲＦの会場を歩き回っていたのは、間違いなく小川先生だろう。カメラを片手に会場内を歩いている小川先生に声をかけて写真を撮ってもらうことも、ＯＲＦに参加した思い出の一つになるかもしれない。（仲尾千枝）

入稿からわずか十八時間。はるばる青森の業者から届いたマップの完成品を手に取り私はこの原稿を書いている。

昨晩の入稿までの数時間を思い出すと今でも、じんわりと手のひらが汗ばんでしまうほどに、それは壮絶なモノであった。

そもそも、このマップは、加藤先生のお得意の思いつきからはじまった。「ねえ、いっちー（加藤研で私はいっちと呼ばれている）。いっちはウォーリーを探せみたいなのかける?」そういう先生の顔は嬉々としていて、私はとても断れないと感じて、このマップの制作を承諾した。

パンフレットに正確な会場図がある以上、このマップは、正確さ」以外で会場を表現するものでなくてはならない。そこで私は縮尺や消失点を無視し、全体を鳥瞰する視点を与えるマップとして、このマップを完成させることにしたのだ。

実際の作業に取りかかったのは、十一月十六日。入稿予定は、その三日後木曜日だった。フライヤー、パンフレットなどをそこらの学生より多く作ってきた自負心があった私は、紙切れ一枚ごときに三日以上かかることなど絶対にないと思っていたのだ。しかし、十六日から、私は地獄に突入する。

ORFmap2009
こんな風ににぎわったらいいなぁ、と。

一日目。下書きがはじまる。コピー用紙はまだまだ白い。もちろん残留。二日目。ペン入れが続く。ネタが尽きて、うっかりアニメやゲームのキャラを描いてしまう。三日目、ついに原画をスキャンしパソコンに取り込むも、そのデータの重さに私のポンコツメビウスが悲鳴を上げる。線画を抽出したり、修正したり。四日目、色塗り。人がゴミのようだ…とテレビとシンクロ。五日目。頭のかゆさと睡魔が極限に達し、入稿の最終リミット、土曜の十五時が近づいていた。入稿間際、私をフォローしていた友人は「ホラーでした。」とコメントしている。（@tokyoicchiで検索してください。）

しかし、世の中は便利になったもので、今では二十四時間年中無休でデータ入稿を受け付け、朝一で配送をしてくれる業者を発見し、そして今に至るわけだ。

途中、私を何度も恐怖に陥れた砂時計を、右下にほどこしたのは、ほんの遊び心だ。

今日、会場で、マップに登場してくれている先生方から、ねぎらいの言葉をいただき、やっと生きた心地がしている。ＯＲＦ当日の賑わいがこのマップに負けないものになることを、断面新聞編集者一同、祈っている。（市川友美@tokyoicchi）

見つけられるかな???

- ●奥田先生が民族衣装を着ているよ。
- ●田中hiroyeah先生は楽しそうです。
- ●脇田先生、光ってます!素敵です!
- ●加藤先生（ガマの）油売ってないで原稿書いてください!
- ●冨田先生、一人ポーカーそろそろやめてください…
- ●村井先生のギター、なかなかです!
- ●ここでもサッカーですか!中西先生…!
- ●殿!ここは江戸ではありませんぞ!

※登場していただいた先生方。多くのご無礼をどうかお許しください。（市川）

しめきりまで五〇分

ここ数年、実行委員として、また、出展者としてオーアールエフに参画してきたが、いつも「展示」について考えさせられる。言うまでもなく、一つ一つのパネルや造作には、それぞれの出展者のエネルギーや時間が凝縮されている。だが、ざっと一〇〇を越える展示が並べられているので、全部見ようとすると、どっと疲れる。よほど目立つかたちにしないと、せっかくの展示を見てもらえないかもしれない。また、そもそもかたちになりにくい場合は、どうすればいいのか。もちろん、目立てばいいというわけではない。中身がなければ、困る。

今年は、幸いなことに、ガーデンの一角を確保できたので、みんなで「展示」について考えることにした。たぶん、さまざまな「展示」に囲まれたなかで、考えるのがいい。

というわけで、今年の加藤研究室は、パネルをつくらないことにした。デモ用のコンピューターもやめた。みんなで会場内に散って、オーアールエフの〈なう、ひあ〉を切り取り、新聞（かわら版）にする。多くの部分は、現場で決める。おかげで、事前の準備は、ほとんどしていない。荷物も、スーツケースふたつで済んだ。机とイスは会場のものをお借りして、みんながノートＰＣを持参して、「断面」を記すのだ。

今年のテーマに合わせて、その名も「断面新聞」。ガーデンの一角で編集作業をして、その場で刷って、来場者のかたがたに配ってみようと思う。かっこよく言えば「ライブパフォーマンス」だが、知人には「超手抜き」と言われた。きょうは、朝から設営がおこなわれている。周りがざわざわしていて、鉄道模型が運ばれてきたり、ナゾの樹が組み立てられたりするなかで、ぼくたちは地味に新聞を作っている。（加藤文俊）

加藤文俊研究室　フィールドワーク展Ⅵ「・」

2010年2月5日(金)～7日(日)
@ギャラリーやさしい予感(目黒駅徒歩3分)
OB展/写真展　同時開催

断面新聞

オーアールエフ、なう。

慶應義塾大学
環境情報学部
加藤文俊研究室
【非売品】

【創刊準備号】

ORF2009 ついに明日開催！

明日から二日間、六本木ヒルズアカデミーヒルズ４０にて慶応義塾大学ＳＦＣのオープンリサーチ・フォーラムが開催される。今日はいよいよ各研究室が藤沢のキャンパスで準備してきたものを六本木へ持ち込み、設置と搬入の作業が行われている。

会場は、多くの先生と学生、そして設営の業者の人たちの話し声や「ウィーン」、「カンカンカン」といった作業音で賑やかである。

入り口付近のガーデンスペースには田中浩也研究室のユニークな形のモジュールツリーが着々と形を成している。右手のデザイン／環境デザイン／環境共生社会ゾーンではそれぞれ作品を地面に広げて作業をしている。小林博人研究会は建築模型を床に這いつくばって製作しており、またその奥では坂井直樹研究会が太い鉄パイプのようなものにLEDのシートを付けている。また左手の情報技術スペースでは徳田英幸研究会がカラフルのケーブルをはんだごてで接続しており、手前のバイオスペースでは冨田勝研究会が六本木ヒルズのシンボルともいえる蜘蛛のオブジェに似た黒い蜘蛛のオブジェを黙々と製作している。どこも、まるで藤沢のキャンパスの中身をそのまま六本木ヒルズに運んできたような状態で、日常のような居心地の良さを感じるものの、たくさんの研究会が集まり一つの場所で作業している様はどこかおかしい。

午後４時すぎ、パネルもだいたい出揃い、いよいよ明日の開催が形として目に見えるようになってきた。「コ・モビリティ社会の創成」ブースに集まって指をさしながら話している先生たちは、まるで学園祭の前夜のような緊張と期待の入り交じった面持ちで、楽しそうである。

ＯＲＦ２００９、アカデミーヒルズをＳＦＣの「創意の庭」に見立て、いよいよ明日開催である。じっくりと、ＳＦＣが二十年間で築いてきた庭の「断面の触感」を感じられる二日間になるだろう。

（村井洋子）

突撃！隣の研究室！

現在樹齢六時間

田中浩yeah!研究室（D07）

ＯＲＦ前日、それぞれのブースは準備に慌ただしい。エレベーターから出てすぐ、エントランスには、田中浩也研究室によるScalableModular Design ＯＲＦ２００９の展示広がっている。入口正面を向いて左手ORFGarden側には、木をモチーフにしたmoduletreeが、その反対側にはエントランスアーチとしてmodulearchが設置されている。

この制作者の一人である、政策メディア研究科修士課程一年の平本知樹さん（twitterユーザー名@tototomoki）にお話を伺った。構想は夏くらいから始まり、実際に形になり出したのは、一、二か月前だそう。今回、木は全部で九つあり、一つの木には３００個のモジュールが使用されている。そのモジュールは一つ一つ、形が違う。たとえばレゴのような同じ形のブロックで作るものとは異なり、おかれる環境の要請で形を変えることが可能で、誰がどのように組み立てるかによっても、出来あがりは変わってくる。多少のコツは必要で、学校で練習をしてから臨んでいるそうだが、今日の組み立ては、実際に会場来て、その場で様子を見ながら設置をしていた。エントランスにあるサイズだけでなく、玩具～家具～建築までの横断的なスケールを包含している。田中研のブース（Ｄ０７）では、小さな模型があるそうなので、自分の手で触れて遊んでみても楽しいだろう。

今後は、新宿にあるＩＣＣというメディアアートスペースで一月中旬から二月中旬まで展示がされるそうで、より大きな６×６×６メートルの空間を、このモジュールでどう充填できるかを試す。ＩＣＣの展示では、モジュールの形を作るソフトウェアもあるので、その場で切り出しも行ってみることが出来るそうだ。興味を持った方は、足を運んでみて頂きたい。（飯田達彦）